

## 公開シンポジウム

## 「地方で医史学の花を咲かせよう」-4

## 革新藩・大洲

坂山 憲史

南松山病院

私は、愛媛で整形外科医として長年診療に携わっています。この、一医師としての見地から大洲と大洲藩の医史について研究を行っています。

日本最古の史書である「古事記」「日本書紀」に記されているように、日本の医療の神は少彦名命であり、また、温泉の神・酒の神としても尊崇を集めています。大洲喜多地方には古くから少彦名命の事跡を伝える伝承や、それにまつわる遺跡が数多く残されており、その後、鍼灸治療が中国から日本に伝わったのは6世紀の半ばと言われています。「遣隋使」や「遣唐使」などにより徐々に伝えられ、平安時代には日本に定着していったそうです。平安後期から室町時代にかけての医療は寺院により行われていたため、中医学（中国医学）は僧侶によって伝承されていきました。室町時代に入ると医師を専門職とする人が現れ始め、中国（明）に漢方を学ぶために留学をする者まで出てきます。また、室町時代になると中国医学を熱心に学び、学んだ中国の医学を基に、日本人に合わせて「熟成」させる為の研究・研究が進められていきました。江戸時代になると鎖国により中国からの情報が途絶えてしまい、この時点で中国から日本に伝わっていた漢方の情報は不十分となりました。しかしこのことは、日本独自の漢方へと発展を促します。この漢方は、そのまま日本独自の伝統医学として発達を続けました。つまり「漢方」というのは、中国の医学をベースに日本で研究・発展した日本のオリジナル医学です。当然、中国に「漢方」という医学名はありません。この時代、日本は唯一オランダと国交を保ちます。そのオランダから現代医学のルーツである「蘭方」が入ってきました。

こうした中で大洲地方の医療は江戸時代に入ると大洲藩の記録などととも具体的にその姿をとらえることができるようになります。大洲藩では、初代藩主・加藤貞泰（さだやす）に医師として仕えたのは田辺作庵秀俊（150石）であり、第3代藩主・加藤泰恒（やすつね）の時代には、二人のオランダ医学の医師・河口良庵、鎌田良球正信を擁していたことから、大洲藩が伊予八藩の中で最も早くオランダ医学を取り入れ、日本の革新的存在であったことがわかります。その後、第13代藩主加藤泰秋（やすあき）に至るまで、大洲藩では常に20名から30名の医師団を擁していました。江戸後期には、大洲を西日本における外科学の中心地とした鎌田玄台正澄が出てきます。鎌田玄台正澄は華岡青洲に学び、帰藩後は全国から入門する者が絶えず、常に数十名を下らなかったといえます。また、治療を乞うて各地から患者が来洲するなど、大洲は西日本有数の医学の殿堂として輝いた空前絶後の時期を迎えました。その大洲藩は第13代藩主の時に明治維新を迎えますが、代々幕末まで続いた医師は谷村家と鎌田家のみです。その後、鎌田家はいったん途絶えましたが、驚いたことに後述する谷村家にあっては現在も医師の家系が続いています。

2016年2月16日、谷村家9代にあたる谷村英彦先生は「伊予国大洲藩医師・谷村元珉純甫資料集成」と題した本を著しました。私は、この本に感動し、元珉純甫が遺した記録などを熟読・精査した結果、この元珉純甫が若かりし日に、杉田玄白の妻・登恵に会っていたことを発見しました。同年7月31日に子規記念博物館で、谷村英彦先生と絵手紙の創始者・小池邦夫先生と私で、「遺録」と題する講演会を開催しました。残念なことに、谷村先生は2017年7月25日に急逝されました。通夜では、1年前の私たちの講演の時に新調されたスーツとネクタイを身に纏い、穏やかなお顔で横たわっておられました。